



写真1 雪煙をあげるカンチェンジュンガ

世界で一番高い山であるエベレスト（8 848m）は‘00年と‘05年にゴーキョピークやカラパタールから見た。二番目に高いK2（8 611m）は‘06年にパキスタンのバルトロ氷河上にあるコンコルディアから見た。今回は三番目のカンチェンジュンガ（8 598m）を、紅茶で有名なダージリンを含むインドのシッキム地方から見に行こうというトレッキングに参加した。

インドを訪れるのは‘97年にアフリカのキリマンジャロに登った際にムンバイ（ボンベイ）を経由した際に往き帰りに各一泊したとき以来であるので、実質的には今回が初めてである。

1. メンバー構成

成田に集合すると、今回のメンバーは7人が東京組みで、他に大阪からの人が1人第1日目の宿泊地であるデリーで合流するとのことであった。すでに海外の山旅も今回で17回目となるので、集合場所で“あらまたお会いしましたね”という挨拶を交わすことも多くなっているが、今回のメンバーにお知り合いはいなかった。加えてツアーリーダーの久保さんとも始めてであるので、全員が初めてのお付き合いとなった。私もそうであるが、シッキムからのヒマラヤ体験というのはネパールヒマラヤを一通り経験して、さて次は違った角度からにでもするかといった動機の人が多い。聞いてみるとけっこうあちこち海外山旅に行っているみたいなので推察はほぼ当たっていた。デリーに着いて一泊すると、翌朝には大阪から来た吹田さんとも朝食の席でお会いできた。戸田さんご夫妻を除いてはみんな一人での参加であり、一人部屋希望者もいなかった。昨年7月のバルトロ氷河のときはほとんどが一人部屋希望であって、なんとなく最後まで親近感を持つことができなかった。だからあの時の山旅記はいまだに書いていないし、今後とも書く気にもならないであろう。8人のうち女性は戸田婦人を含めて2人であるので、もう1人の女性である太田さんは自動的に1人部屋になってしまったが、彼女も海外山旅を豊富にこなしているようであるので、1人だから寂しいといったこともなさそうであった。デリーからはインドでの案内役としてガネッシュ君が帯同した。彼はわれわれがインドにいる間は山の上まで行動を共にするということである。

2. デリーからヨクサム

ツアー第2日目はデリーから国内線を使ってインド北部の都市であるバグドグラまで移動して、さらに車を使って紅茶で有名なダージリンまでである。デリーからしばらくはトヨタの4WD 3台に分散乗車して幹線道路を走る。上下合わせて2車線なのにわれわれの車もどんどん追抜きをかける。他の車も負けてはいない。中にはトラックの荷台の後ろに“Please Horn Move Side”と書いた車もある。“クラクションを鳴らしてくれれば横にどいてお譲りします。”とでも言う意味なのであろう。ところが実態はまるでとんでもない。このトラックがドケドケとばかりに蹴散らすのがときに追抜きをかけていく。追抜きをかけられた車は、“てやんでー”と譲らないが、対向車が来るとスピードを緩めて入れてあげる。こんなんでよく事故にならないなと感心するが、ぎりぎりのところでバランスは保たれている。年間の交通事故死者が8万人になって問題化されていると説明された。インドの人口に比べたらたいしたことないなとも無責任に思ったが、よく考えてみるとこんなに車



写真2 ダージリンのSLの前で



写真3 ダージリンのホテルからの景色

が多いのはインド全体のごく一部であって、その中での数であるからやはり問題は大きいのであろう。途中からダージリンまではSLが走る線路に沿った自動車道になる。この路線は庶民階級の乗り物になっているみたいである。

ダージリンで早くも紅茶の土産を購入する。帰りはここを通らないというのでまあ仕方がない。ダージリンで買ったということに意味があるのだ。ここはインドのリゾート地ということで、お金持ちが夏になると避暑地として利用するところらしい。ホテルの窓からは果てしなく広がる一面の紅茶畑が見下ろせる。

第3日はダージリンのバザールを見学した後で、また一日かけて車でのヨクサムへの移動である。バザールはちょうど通勤通学時間帯とぶつかったためか朝からにぎやかであった。前日の車での移動中も感じたことであったが、この地方の学校へ通う子供たちはみんなこぎっぱりとした身なりをしている。男の子は白いワイシャツにネクタイを締めて、女の子はおそろいの制服と思える格好をしている。'97年にアフリカのキリマンジャロに登った際に寄ったムンバイはごちゃごちゃした街で、街全体がスラム街といった感じを受けて物貰いも多く“貧しい国インド”の印象を強く持たされた。しかし今回は躍進するBRICsの一角を担うインドの面目躍如といった感じである。

途中チベット仏教のペマヤンツェ僧院を見学する。インドはヒンドゥー教でパキスタンはイスラム教くらいの知識しかなかった。しかしインドではヒンドゥー教83%・イスラム教11%・キリスト教2.5%・シーク教2%・その他に仏教・ジャイナ教などがあるということで、仏教はその他の部類にしかない。その割にはこの地域のような山奥ではペマヤンツェ僧院を始めとしてチベット仏教の影響が強い。ネパールヒマラヤでよく見かけたタルチ



写真4 ダージリンの紅茶畑



写真5 ダージリンのバザール



写真6 ペマヤンツェ僧院

は大事だということは、頭ではわかっているが行動が伴わない。ここにも外人さんはたくさん来るらしく7・8人の一団と出会ったので、吹田さんに負けじと声をかける。“Where are you come from?” (どこの国から来たのですか) オーストラリアとニュージーランドの混成隊であるということであった。“Oh, I went New Zealand about twelve years ago. I went Milfordtrack.”などとまくし立ててやる。向こうからもなんか言ってきたが例によってまったく聞き取れないので会話はそこまでとなる。‘00年に初めてネパールのゴークョピークへ行ったときには日本人は団体旅行が多く外人は家族や仲間同士が多いとの印象を持ったが、‘05年のエベレスト展望3大ピークあたり以来は外人さんも団体が多くなったなど感じていた。この一団のように2カ国の混成隊ということは、旅行会社の仕掛けに乗ったということであろうからわれわれと同じだ。海外登山の大衆化は世界的な流れなのであろう。私はいいことだと思うが、山が汚れたとかマナーが悪くなったとか言う人も出てくるだろうな。あの登山注意看板もそんなことへの警鐘であろう。“悪かったねー” ただしトレッカーの絶対数はネパールヒマラヤに比べると、外人も日本人もぜんぜん少ない。

この地域でも荷運びはヤクとかゾッキョが主役である。(ゾッキョ=ヤクと牛との掛け合わせ。ヤクは寒さには強いが温度が上がると弱い。ゾッキョはどちらにも強いが一代限りで繁殖はできない)

キッチンポーターがわれわれより先に回って昼食の準備をしておいてくれたのでちょうど良い時間に昼食にありつけることができた。ほんとに贅沢な山登りである。近くに鳥が来たといって戸田夫人がしきりと林の中を覗き込む。山登りをする人には花に詳しい人は多いが、鳥には無関心の人が多い。



写真8 途中の休憩所



写真9 ヤクの荷運び



写真10 昼食後の休憩

私のようにどっちもだめなものたまにはいる。戸田夫妻は両方に対して博識で珍しい。山登りでしょっちゅう付き合っているグループがあって、この中にいろいろ特技を持った人がいて、刺激の仕合から特技の内容を高めているようである。何かにつけてこれに勝る勉強方法はない。

前半は上り下りが多いと言っていた久保さんの言葉通りの展開が待っていた。ずいぶん登ったつもりなのに腕時計に付いている高度計の数字はちっとも伸びない。3時間くらい歩いたってヨクサムでの1785mから1900mくらいまでになったに過ぎない。普通日本での山登りでは300m登るのに1時間というのが目安である。いくらヒマラヤではゆっくり歩くからといって、これではいつになったら着くものやらと心配になってしまう。昼食後、やっと急登の領域に入ったがまだ2300m以下である。それでも我慢して高度を上げていくうちに期待していた石楠花の花が出てきた。日本でよく見かける石楠花は、陽光を求めて道側に向かって花びらの笑顔を向けていることが多いが、ここでは一本の木毎の独立隊である。サードのソンさんが“ラリーグラス”と教えてくれた。英語ではそのように言うのかと後で辞書を引いてみたら“rhododendron”と出ていた。“ラリーグラス”はこの地域での呼び方であるのかもしれない。



写真 11 石楠花の花

石楠花が心を慰めさせてくれるのはいいが一向に目的地に着きそうもない。戸田夫人の歌でも歌いましょうよというリクエストに答えて山賊の歌など数曲歌う。時間は4時を回って歩くのに嫌気が差していたところで歌なんか歌ってしまったので余計足が重くなった。太田さんは個人荷物の持ちすぎか次第に遅れ始める。吹田さんも足に痙攣か何か異常をきたしたようで隊列を離れる。それまで後ろのほうを歩いていた私も面倒くさくなってきて、早く着きたい一心で先頭を歩くガイドのアーターの後ろについて歩いた。しかしアーターは時々止まって後ろが追いつくまで先に行かしてくれない。年取ってたくさん経験を積むことで、この程度のことでいちいち動揺はしないはずであったが、足の疲れが心のタフさにマイナスポイントを与えている。

まあそんなこともあったが第1日目のツォカの部落(3005m)に着いた。ここは今回の行程中の最後の部落である。これより先には人が住んでいるところはない。遅れていた太田さんと吹田さんもそれほど遅くならずに到着した。この日からテントの予定であったがここ数日雨交じりの天気が続いていたので、ツアーリーダーの久保さんが先回りしてロッジを確保しておいてくれたので快適な夜を過ごすことができた。

5. ツォカ芸術祭

ツォカのロッジでは都留さんと登戸さんが同室であった。登戸さんは今回のメンバー中で唯一の還暦以下の55歳である。ハイテクに強くノートパソコンを山の中まで持ってきた。幅広くいろいろな知識を持っている感じであり、おそらく特にハイテク技術分野を職業としているというわけではなく、PCやデジカメの扱いなどは潜在能力の一部を駆使するだけでモノにできてしまうといった感じである。私も5年前では最新といえた画面が大きく1.1kgという超軽量のPCを持っているが、電池は40分しか持たない。登戸さんのPCは同じくらいの重さにかかわらず、電池は4時間以上持つという。脅威の技術進歩である。さっそくベートーベンの『田園』をかけてくれる。これを期にクラシック論議が始まる。登戸さんがモーツアルトの#40が好きだということで、私があの曲の持つ副題の『悲しみのシンフォニー』から、ヨーロッパ人の受ける悲しみと

いうものは理解できないと言い出す。耳に心地の良いメロディーであるが、そこから悲しみという言葉は浮かんでこない。日本の歌舞伎や文楽のように“おさんはよよと泣き崩れ”などとやってくれたほうがいい。とも思うが、実は#40 へのこの疑問が私のクラシック音楽への興味を開いてくれたのである。もし私が死んだときに誰か悲しんでくれる人がいたとしたならば、この曲で送り出してもらいたいと思っているほどである。話は悲しみの捕らえ方から発展して、『悲愴』という曲はベートーベンとチャイコフスキーのがあるがチャイコフスキーのほうがよりダイレクトに悲愴を感じられると言うと、登戸さんは“それならこのPCに入ってますよ”とさっそくかけてくれる。シッキムの山の中でチャイコフスキーの『悲愴』をかけるなんて、われわれの神経はどうなっているのか、山の石楠花が驚いているであろう。『悲愴』を聞きながら今度は絵の話になった。前日のペマヤンツェ僧院で見た仏教画に、顔や身体は正面を向いているのにかかわらず鼻や足は横を向いているのがあり、これがピカソのある時代の技法を思わせるという。私はおっばいのところしか見ていなかったのもそんなところには気がつかなかった。藤田嗣治の描く女性の白のきれいさとか猫の躍動感の話や、私が大好きな萬鉄五郎の『裸体美人』（国立近代美術館所蔵：常設されているので大体いつでも見ることができからお勧めする）などの話が花を咲かせる。熊谷守一の単純な線で描かれた絵を見て、昭和天皇が“これは子供の絵ですか”と聞き、数年後に別の熊谷守一の絵に接した昭和天皇が“私はこの絵の作者を知っています”といったエピソードなどが語り合われた。都留さんは岡本太郎が好きで、あの日本人離れした感性にたまらなく引き付けられるという。この日は日本人画家が主に話題の対象になり、『悲愴』の曲の終了とともに食事時間になったので芸術談義も終わりになった。

夜、小便に外へ出ると別のロッジからポーター達の歌声が聞こえる。ネパールヒマラヤの歌だと思っていた“レッサンピリリ”を歌っている。そういえば“ビスターリ”（ゆっくり）“ダンネバート”（ありがとう）“プギョ”（おなかいっぱい）“アリアリ”（少し）などのネパールヒマラヤで覚えたカタコトがすべて通じる。

6. 石楠花街道

われわれの荷物の運搬は、ヤクだけでなく馬も担当していた。皆さんお世話になります。彼らのおかげで今日もラクチン登山を楽しめます。

ツォカは小さな部落なのであるのに立派なゴンパ（チベット仏教寺院）がある。この地域は国立公園化される計画があり、そうなるとこの部落は集団移住をしなければならないそうだ。ど



写真 12 朝の荷造り



写真 13 ツォカのゴンパ



写真14 石楠花アラカルトと石楠花街道

んな関係があるのであろう。どこでも行政というやつはトンチンカンにできているものらしい。
歩き始めるとすぐに石楠花ラッシュ地域に入る。赤・白・ピンクなどなど。黄色がないと思っ
ていたら上のほうに行ったら、少し色は薄いがちゃんとサービスしてくれた。この石楠花は満
開になっても花びらは控えめにしか開かない。一つの額に複数の花びらの塊がついている。おそ
らく植物学的には何らかの名前がついているのであろう。こういうときに普段からの好奇心の少
なさが人生の楽しみを減じさせてしまう。日本でも石楠花が有名な山はたくさんあるが、これほ
どたくさん咲きそろったところはないであろう。上を見ても、右を見ても、左を見てもみんな石
楠花である。足元に目を転ざるとさくら草がある。当然皆さん写真を撮りまくる。登戸さんと狭

山さんは同じタイプのペンタックス。都留さんと戸田さんはビデオとカメラとの併用。吹田さんは3台のカメラを駆使する。1台はビデオとして使いこなしている。太田さんは『移るんです』で現実派。私はオリンパスのデジカメで“軽さ”を基準に選択した。山ではこれが一番の選択基準である。『何のために写真を撮るのか』この哲学の差がカメラの型番を決めている。

前に戸田夫人から“主人はものすごいクラシックファンなんです。”と聞かされていたが、前日のロッジでの芸術談義は隣室にいた戸田夫妻にも聞こえていたらしかった。戸田さんと前日の

続きになった。モーツアルトの#40から引き続いて#41のジュピターの話になって、“ジュピターという題名はホルストの『惑星』の中にもありますね。私はジュピターに関してはホルストのほうが好きですね”と私が切り出した。もっともモーツアルトのジュピターはおそらくギリシャ神話に出てくるジュピター神をテーマにしているのに対して、ホルストのものは木星をテーマにしているのだから、題名が同じだからといって比較の対称にするほうがおかしい。私の場合は映画などでBGMとして使われる機会が多く、ギリシャ神話なんて知らないという理由で、ホルストに親近感を抱いているのに過ぎない。しかし戸田さんにかかると言下に“格が違います”の一言で済まされてしまった。こんなしぐさに、戸田夫妻は奥さんが社交的で旦那はおとなしい印象であるが、案外亭主関白かなと思わせる。以前にカムチャッカのアバチャ山で一緒した常陸中夫妻からもそのような感じを受けたが多分一緒だろう。

サーダーのソンさんはGPSの携帯電話を持っているようで、こんな高いところでも電話をかけている。案外仕事の電話ばかりでもなさそうで、8ヶ月になる娘のことが心配でかけていたとニコニコしながら言う。

4000m近くになると石楠花も背丈の低いものが多くなり、まだこの季節ではつぼみの段階であった。天候はだんだん悪くなってひょう（雹）が降り始めた。気温が低いので落ちた後も解ける事はなく、雪のように白く降り積もった。ゾングリのテントサイト(4030m)に着くとあたりは白一面の世界になった。ひょうだけではなく雪も混じっているようである。つい3日前のデリーでは40℃近かった気温が0℃近くになってしまった。それでも何とかなっちゃうんだから人間の対応力というものはいしたもんだ。ポーターが頻繁に回ってきてテントの雪落としをしてくれる。



写真 15 さくら草



写真 16 ゾングリのテントサイト

7. カンチェンジュンガ

ゾングリのテントサイトからは周りの山が障害になってカンチェンジュンガを見ることができ

ない。翌朝の日の出前に、近くにある100mほど高いピークに登ってモルゲンロート(朝焼け)に輝くカンチェンジュンガを見ようというスケジュールであった。毎日一度は雨に降られていたので、必ず見られるという保障はない。しかし山登りを志す人間はそんなことくらいではひるまない。3時起きで朝食は下りてから、というスケジュールをものともせずヘッドランプを頼りにピークを目指す。日の出よりだいぶ早くにピークについてしまった。あたりが白けてきてもカンチェンジュンガ(8598m)は雲の中だ。それでもしばらく待っていると雲が切れてきてようやく世界第3位の勇姿を見せてくれた。カブルー(7315m)やラトン(6679m)はこれより近いのもっと鮮やかに見える。このころになるといつの間にかピークには多くの外人さんたちも集まってきていた。吹田さんは三脚に2台のカメラを取り付けて奮闘している。前夜、同じテントであったので雑談の際、“ただでさえシュラフや防寒具などの重いものはヤクや馬に持たせているのだから、自分の身の回りのものくらい自分で持つべきですよ。最近では金を払えばポーターが持ってくれるのだからといってポーターに預けて平気な顔をしている人が多い。”ということを書いてしまった。この言葉のためだけとは思えないが、吹田さんは隊列に追いつけなくても重たい写真機材を自分でピーク頂上まで持ち上げた。何をもってこの72歳になる人をこれほどまでに頑張らせるのであろうか。戸田さん流表現を借りれば“格が違います”といったところか。

ピークから下りて朝食をとった後、今回のトレッキングの最高到達点であるゾングリ峠(4300m)へ向かう。朝一時晴れ渡った空も雲が上がってきて何にも見えなくなった。本来であればここからカブルーが間近に見えるということであるがまあ仕方がない。峠に



写真17 後方がカンチェンジュンガ



写真18 ピークからのテントサイト全景



写真19 ゾングリ峠での集合写真

着くとソンさんが『アッチュレー』と大声で叫ぶ。山頂に立ったときなどに、神様と一緒にのところにいるという意味で叫ぶのだという。何回も繰り返していた。日本人が山頂で万歳三唱をやるのと同じかもしれない。

ガイドたちが『レッサンピリリ』を口ずさんでいるので一緒になって歌いだす。ネパールで聞いたのと節回しで細部に違うところがあるが、出だしのサビの部分はほとんど同じだし、歌詞も私が覚えたのと同じであった。ネパールだって地域によって違いがあったし、この程度の違いは仕方がない。

夕食後の雑談中に狭山さんと山のトレーニングの話になった。狭山さんは私と同年であるが、容貌からして『歩く実直』といった感じで、現役のサラリーマンであった頃はなかなか休みが取れなく、今回のメンバーの中では海外登山経験は最も少ない。今回も多少息を切らせているようなときもあったが、かつては青梅マラソンに9年連続して出場した経験があるという。基礎体力は十分ありそうだ。私のやっていることを先輩面して話す。“毎月1回山登りで鍛えるということはけっこう大変です。水泳がいいですよ。私は近所の公営プールで週2回800m泳いでいます。筋肉は週2回以上使わないと衰えるといわれています。だから身近に行える水泳やウォーキングがいいですよ。大事なことは続けることです。”と言っていると、向こうのブロックから猛然と太田さんが切り込んできた。“あら、山登りは山で鍛えなきゃだめですよ。私なんか月4回は行ってます。”その割にはこの人は今回のトレッキングでいつも最初にバテテいて、ピークアタックのときは特別メニューを組んでいてもらっていたはずであるが、そんなことは棚上げして自分の結論で話題を終わらせてしまう。脅威のおばさんパワー。

夜中に小便のためテントの外へ出る。高山に来ると降り注ぐ星空に寒さを忘れて感激にふけたものであるが、ここ2・3年星が小さくしか見えない。慣れがそうさせるのか。もしかしたら目

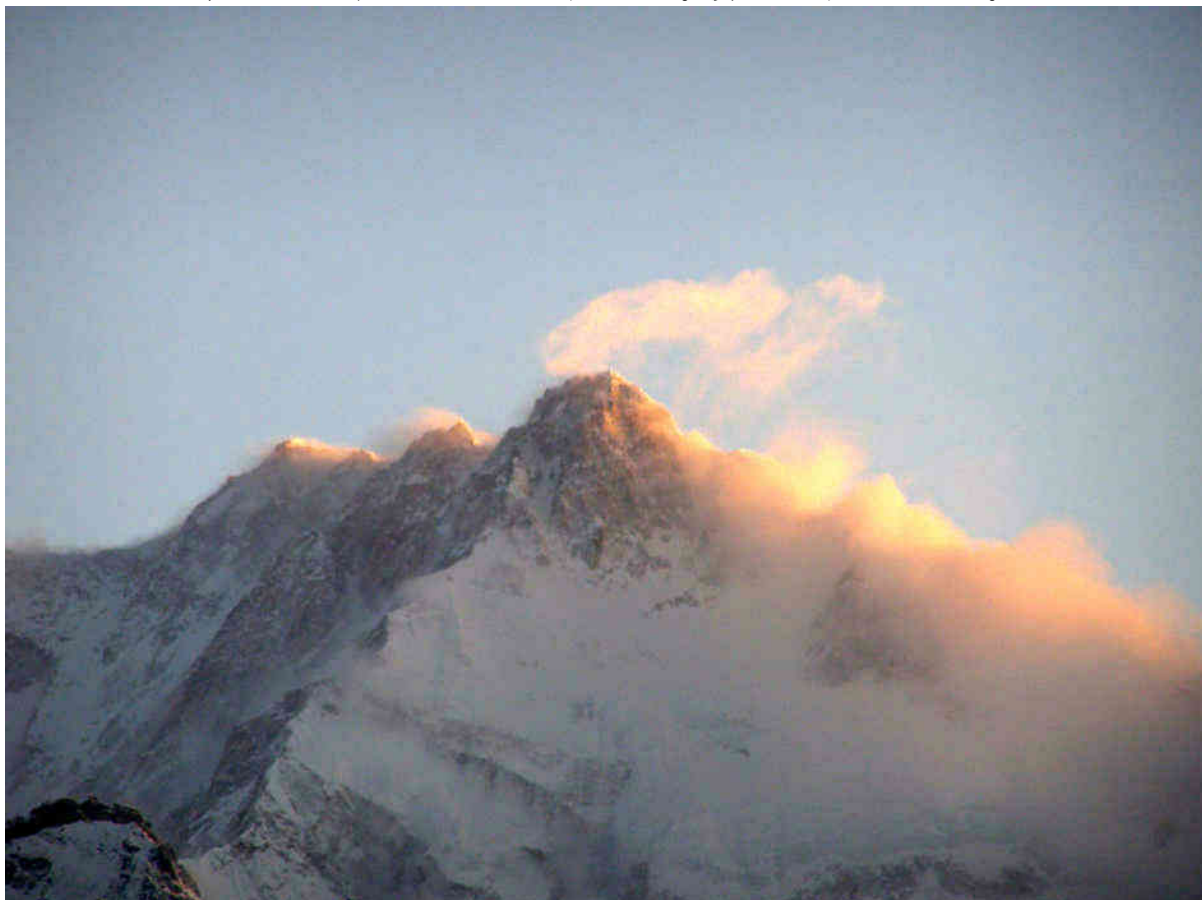


写真 20 モルゲンロートに輝くカンチェンジュンガ

の検査を受けなければいけないのかもしれない。でもこのときは流れ星を見ることができた。

次の日も未明に起きて前日と同じピークへ向かった。またまた流れ星を見た。幸運の兆しだ。少し登るとカンチェンジェンガが見えてきた。モルゲンロートが期待できそうだ。モルゲンロートというものは朝日と山の間にあるチリなどの浮遊物とその輝き方に大きな影響を与えるのであろうから、この日は少し雲が多すぎたのかもしれない。感激に心がビショヌレになるとまではいかなかった。この山は朝日の方角に邪魔をするものがない。間に少し低い山脈が横たわっているくらいのほうがモルゲンロートには良いのかもしれない。空が白んできたからパジャマを脱いでさあ着替えようとしているときに、いきなり太陽の輝きに身をさらされた山が“あら、はずかしい”ってんで顔を赤らめるのがモルゲンロートなんだろう。だからこの山みたいに途中のジャマものがないと、太陽が出たときにはすでに着替えは終わっているのだから赤くならないのだ。(この高橋学説は信じないで下さい。・・・念のため)

このトレッキングの登り始めの最初に出会ったオーストラリアとニュージーランドの混成隊にまた出会った。防寒具に身を包んだ彼らを別人だと思ってまた“Where are you come from?”とやってしまった。ちょっとバカにされたみたいだった。彼らはわれわれより一日余計にかけて登ってきた。今まで海外では外人さんは長い足でわれわれより短い行程で歩くのが普通だと思っていたが珍しいこともあるもんだ。

8. 下山

下りにかかっていよいよここでカンチェンジェンガやカブルーも見納めというところで写真撮影のための休みを長めに取る。もう一度見ることがあるかなー。



写真 21 タルチョを通してのカブルー(左)とカンチェンジェンガ(中央)との別れ

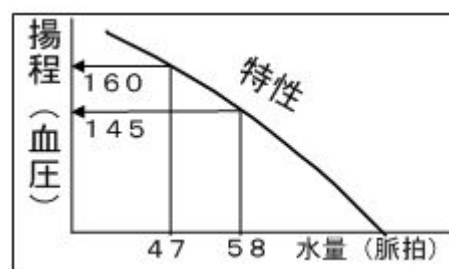
しばらく下るとまた石楠花帯に入る。戸田夫人が“石楠花のつぼみもきれいね”と言う。“お酒飲む人、花ならつぼみ。今日もサケ・サケ、明日もサケ”と教えてあげると旦那がしきりと感心している。どうやら西洋クラシック音楽には強いが、日本のクラシックにはなじみがないらしい。都都逸や落語もけっこう面白いもんだよ。

私はもともと山の下りが下手だった。年取って身体のパネがなくなってくるとますます下手になった。最近をストックを使ってごまかしている。日本の山はこの10年ほどの間にやたら木道が増えた。以前は尾瀬名物であったが、今やそこいら中にある。『高山植物の保護』という名目になっているが、丹沢の檜洞丸や谷川の天神などはどこを見たって高山植物なんかいないところにも木道がある。みんな縦長の板つきれでできている。雨が降ったときなんかの下りでは滑って危ないことこの上ない。天神では滑って転んで腰を打ったこともある。以来天神なんか2度と行く気はない。このシッキムにも木道はある。しかし裂いたマキ状の丸太を横にして敷き詰めているから滑ることなんかない。コストはこの方がはるかに掛かることであろうが、登山者にとってはこの方がありがたい。インドでできることが何で金持ちのはずの日本でできないのだ。付ける必要のないところに付いている木道なんて、どうせ利権政治家とインチキ土建業者の結託の産物だろう。何のために木道を付けるのかという出発点が間違っている。

9. 医者論

シッキムは高山だからということで医者診断書の提出が旅行会社から義務付けられた。指定された医者に行くと『心電図におかしな動きがある』と言われた。毎年会社でやっていた通常の検査では言われたことはないのだが、海外登山のための診断では以前にも言われたことがある。しかしそのときの医者は、“まあこの程度の登山に差し障ることはないでしょう”と言って許可を出してくれていた。しかし今度この旅行会社が指定した医者はロードランナーの上を走らせたりいろんな検査を加えた上で、今飲んでる高血圧用の降圧剤では足りないからといってもうひとつの心拍数を減らすための薬を加えてきた。私は普段から鍛えているので心拍数は55~60と普通の人に比べると少ないはずである。この薬を服用するようになって心拍数は40台後半にまで落ちてしまい、逆に最高血圧は160台に上がってしまった。

私は空調設備の技術者であるからポンプの特性については詳しい。ポンプというものは図に示すような右下がりの特性曲線を持っている。すなわち水量が多くなれば水を上へ持ち上げる力（揚程）は少なくなり、逆に水量を少なくすると水をより高くまで持ち上げられる、という特性を持っている。心臓はよくポンプにたとえられるので、同じように考えてもよいであろう。つまり私の脈拍数を必要以上に抑えたので血圧は上がってしまったのだ。血圧が上がったことはまあ目をつぶろう。問題は脈拍数が少なすぎることで



である。高山病になりやすいのは朝であると言われる。睡眠中は呼吸数が少なくなる。ただでさえ酸素の薄い高山で呼吸数が少なくなるので酸素の供給が間に合わなくなるのである。ということは無理やり脈拍数を抑えるということは酸素の供給を少なくさせて高山病になり易くなってしまっているのではないかと。私は、山行中は新しく処方された薬の服用はやめた。ヘッポコ医者に壊されてたまるかっていうんだ。

10. ガイドたち

ネパールのように山岳観光が最大の産業である国に比べるとインドは仮にも世界から注目されているBRICsの一端である。逆に言うと山しか飯の種がないわけではないので、山岳観光のサポートシステムはかなり落ちるといのが予備知識としてあった。しかし私には何一つ不服はなかった。食事は毎日カレーの辛いやつかと覚悟をしていたがそんなこともなかった。もっとも

これはツアーリーダーの久保さんの努力が大きかったと思う。彼はいつも到着1時間前くらいになると先に行って、昼飯には喉の通りが良い日本そばを出してくれたり握り飯を作ってくれたりした。ここのキッチンポーターにはそんな技術はないはずなので、ひとえに久保さんのおかげであろう。ガイドたちのテントでのこまめな雪落しやガネッシュ君の“アラームセイ・YAMAGAWA”といった陽気なアドバイスは、われわれを気持ち良いトレッキングに導いてくれた。



写真 22 ガネッシュ・私・サーダー・(前)アーター

狭山さんがガネッシュ君に聞いた。
“アラームセイというのはゆっくりと

という意味ですか？それとも危ないという意味ですか？”実はこのことは私にとっても疑問であった。私がガネッシュ君に聞いたときは“ゆっくり”の意味だといっていた。しかし彼はゆっくりというべきときにはビスターリを使っていて、誰かがつまずいたりよろけたりしたときに“アラームセイ”と声をかけた。私はサーダーのソンさんにも聞いてみた。ソンさんの答えもアラームセイは slow だといっていた。狭山さんに対してガネッシュ君は“ゆっくりという意味だけど注意しろという意味も含んでいる”と答えた。なんとなく判ったような気がした。だからこの山旅記の表題は「シッキム・アラームセイ」とした。

ソンさんやアーターはインド人といっても写真に見るように日本人や中国人に近い顔立ちである。6月になるとこの地域は雨季になって山登りには適さなくなる。ソンさんは5月中にあと2回山に入るという。彼らにとって稼ぎ時だ。

山での最後の夜となったツオカのロッジでお別れパーティーをやった。トンバという名のこの地方独特のどぶろくを出してくれた。ソンさんがトンバの由来をもったいぶって説明してくれた。この時点ではまだ翌日に1000m以上の下りを残していたので心行くまで飲むというわけには行かなかったが、まあ山の中だからそのくらいにしておいたほうが良い。ネパールのシェルパと同様にここのガイドやポーターも陽気だ。シェルパダンスと同じと思える踊りを披露してくれた。当然のごとくわれわれも踊りの輪の中に組み入れられた。吹田さんも、都留さんも、登戸さんも、太田さんも、戸田さん夫妻も、私も、そして『歩く実直』の狭山さんも踊りまくった。最後に日本の歌を歌ってくれということで『雪山賛歌』を歌った。その後でサーダーが特別に私の『レッサンピリリ』を歌ってくれという。以前ネパールでこの歌を得意になって歌っていたら、“その土地の人の歌を出しゃばって歌うもんじゃない”などと同じツアー参加者にたしなめられて不愉快な思いをしたことがあるので控え気味にしていたのであるが、お墨付きをもらったのも同様であるので目一杯歌わせてもらった。

ヨクサムに戻って彼らともお別れというときに、走り始めた車の中から私が“アッチェレー”と叫ぶと、ポーターの中から『レッサンピリリ』と声がかかった。私の歌も彼らに喜んでもらったのだと解釈した。まるでシッキムの王様から勲章をもらったような喜びが残った。